



## 予餞会 99 回生からの贈り物

予餞会で湘南の明日が見えた。99 回生は勉強・行事・部活動を大いに満喫し、まるでコロナ禍の制限を押し除けるように成長した。湘南ならではの挑戦を続け大切なものを残していった。

1・2 年生には、湘南という巨大な器の中で自分の可能性を信じ、未来に渡って人々の行動を変容させられる力を身につけてほしい。

### 99 回生の言葉

- ひとりで抱え込み過ぎず、協力して。一瞬を大切に。
- みんなのパワーがすごいので、それを引き出す役割を買って出た。全力で取り組むと応援してもらえる。
- 時間には限りがあるから、やるべきこととやらなくてもよいことを明確にする。
- 高校生活は楽しむべきだ。
- 楽しそうなことも面倒くさそうなこともどんどん挑戦してほしい。  
挑戦しなければそれが自分に合っているかどうかさえ分からないから。
- 「最も困難な道に挑戦せよ」は湘南の精神を良く表している。
- 自分の限界に挑戦するのは確かにきついが、きつい中でも楽しもう。  
仲間との他愛ない会話がとてもありがたかった。
- 自分の個性を体育祭で発揮できたことに感謝している。
- 体育祭至上主義はダメ。勉強にかけるもよし、部活動にかけるもよし、自分で追究したいことにのめり込むもよし。互いの挑戦を尊重し合えることが何よりの宝。
- 湘南生は集中力がすごいので、周りが見えなくなることがある。俯瞰することが大事。追い込まれそうになったら逃げることも必要。

第 12 号において、最も困難な道に挑戦し続けるための 3 つの条件を挙げた。

- 1 寝ること
- 2 他者とのコミュニケーション
- 3 身体感覚と感情の取り戻し

「寝ること」と「他者とのコミュニケーション」によって、私たちは自らの経験を抽象化し、既存の知識への統合を行っていく。

さらに、「身体感覚と感情の取り戻し」として、好奇心をもって、「いま、ここ」の身体感覚に注意を向け続けながら、過去のトラウマティックな経験を構成する認知的、感情的、感覚運動的な諸側面を編み上げ、理解可能な言語に翻訳することを学ぶ必要がある。(熊谷晋一郎著「当事者研究」)

目先の結果にとらわれず応援してくださる方の笑顔や未来の社会をイメージして目の前のことに全力を尽くす湘南生には是非留意していただきたい。

## とことんのめり込もう 3

今年度、湘南から 20 名が東京大学に合格を果たした。校長室だより第 5 号、第 19 号で紹介した東京大学総長藤井輝夫さんの改革が前進している。2023 年 9 月 24 日、『朝日新聞 Think キャンパス』に【東大・藤井総長インタビュー】「リーダーが語る 10 年後の大学」が掲載された。

藤井さんは、10年後の社会について「当座の情報は、デジタルの世界でほとんど集められるようになりますから、フィジカルな経験、体験がより重要になってきます。(中略)相手の文化やものの考え方を大事にし、違いをきちんと受け入れたうえで、世界の人と一緒に仕事をするのが求められる社会になると思います。」また、10年後の大学の役割について「専門性と専門性をつなぐことが大学に求められるようになると思います。私の専門である船舶工学を例に挙げれば、船を造るための学問を船舶工学として体系立ててまとめておくとその専門を学ぶのに効率がよかったわけですが、他の専門分野、例えばサステナビリティについては、横のつながりが薄く配慮されにくい面がありました。これからは専門性をどうつないで、人類や地球にとってより良い解決法を見いだしていくかが問われます。その部分での大学の役割は非常に大きい」。

東京大学は起業家教育を約20年、体験型の活動も10年やってきた。そして、「起業は経済的な成功を得る手段だけではなく、良い社会をつくりたいという志のある人たちがリソースを持ち寄って実現するための一つの方法である」という理念に基づき、学生が起業家としての一步を踏み出せる環境を整え、相応しいプログラムを提供している。

高校時代に水泳部の活動のほかに、AOR (Adult Oriented Rock) のバンドでギターとボーカルをやっていた藤井さんは「やりたいことを実現するために何が必要なのか。それは教科的な学問の専門性かもしれないし、チームワークかもしれない。あるいは必要な専門性を持った人を探し当てて一緒に仕事をするかもしれない。高校生でも大学生でも、やりたいことを実現していく経験は大切です。」まず好きなことを見つけてとことんやってみるという湘南生に受け継がれている精神は、藤井さんの理念に通じるのではないか。藤井さんが東京大学という巨大な船でどんな未来を航行し、それをどう世界に発信していくのか注目したい。

### 外洋に向けて意識を開くべき時代

元警察庁長官の松本光弘さん(54回)が日本経済新聞に連載している『明日への話題』として1月31日に『北極海と南洋』が掲載された。2年前の冬に、初めて日本橋川でカヤックを漕ぎ、見慣れたはずの風景、左に兜町の証券街、右は菓の街・日本橋本町が新鮮だった。それ以来、仲間もできて横浜や湘南でも漕ぎ、巖島神社の鳥居も漕いでくぐった松本さん。カヤックではないが、私もヨットで真鶴や熱海に寄港して景観の魅力に取りつかれた方なので、松本さんの気持ちはよくわかる。カヤックやヨットは自然の条件に大きく左右され、自分の力で航路を切り開く中で日常を問い直すにはこの上ないスポーツだ。松本さんは「航路は古来、日本各地を繋いできた。戦国時代には南洋にも飛躍していたのに、鎖国以来、海洋国家という気はしない。外洋に向けて意識を開くべき時代が再来している気もする。」

私は40年余りセーリングをしてきたが、日本では海を楽しむ文化が育ちにくくなっていると思っている。例えば、日本は海に囲まれているにもかかわらず、ヨットで停泊できる港が少ないなど、レジャーには必ずしも優しくない環境を感じたものである。日本は島国なのに海洋国家という気がしないのはこのことが一因ではないか。

一方で、このような状況は、漁業、レジャー産業、サステナビリティ教育、海洋科学が横につながって新しい価値を生み出すチャンスでもあり、挑戦に値する新分野に成長する可能性は十分にあると考えている。



「飛翔」作者の廣田雷風氏と